

Title	補足疑問文に用いられるdochとnoch
Sub Title	Abtönungspartikeln doch und noch in Ergänzungsfragen
Author	岩崎, 英二郎(Iwasaki, Eijiro)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2007
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.24 (2007. 3) ,p.1- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別寄稿
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20070331-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20070331-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 補足疑問文に用いられる doch と noch

岩崎英二郎

- I はじめに
- II doch について
- III noch について
- IV noch についての Exkurs
- V doch と noch の組み合わせ
- VI おわりに

## I はじめに

職業柄人様から論文の抜き刷りを頂戴することがよくあるが、むかしは、とくにまだ若かったころは、ろくろく読みもしないで通り一遍の礼状だけですませることが多かった。自分の関心事にかまけて、他人の研究対象にまでかまってはられないとの気持ちが働いていたにちがいない。60年来の友人小塩節氏の説によれば<sup>1)</sup>、大学の紀要論文なるものには読者が3人しかおらず、その3人とは書いた本人と印刷の校正者とあともう一人とのことである。小塩説の真偽のほどはともかく、上記の自分の行状に照らしてみれば、さもありなんと思われなくてもない。私の場合も、自分の書いたものを他人からまじめに論評してもらったことはめったにないが、反論を頂戴してなるほどと反省したことが少なくとも2回はある。そしてそのいずれの場合も、奇しくもかの関口文法がそこに介在していた<sup>2)</sup>。以下

---

1) 松本道介 (2006) 190 頁。

2) 諏訪田清 (1986) ; 佐藤清昭 (1995)

の拙論はその反論を書かれた諏訪田清、佐藤清昭両氏に負うところがきわめて大きいことをあらかじめお断りしておきたい。

## II doch について

自分が知っていたはずの相手の名前をたまたま失念してしまい、「お名前はなんとおっしゃいましたっけ」と相手に尋ねる場合、ドイツ人は *Wie war doch Ihr Name?* とか *Wie hießen Sie doch?* などの表現をよく用いるが、なぜこのような場合に *doch* という心態詞が好んで用いられるのだろうか、というのが本論の最初のテーマである。たまたま度忘れしたことを自問したり他人に尋ねたりするのは、きわめて特殊で、ごく限られた場合であると思われるかも知れないが、そのようなことはけっしてまれなケースではないらしく、筆者の手許にもその具体例がかなり多く集まっている。まずはそのいくつかを 18 世紀から現在まで年代順にお目にかけることにしよう<sup>3)</sup>。

### (1)

EVCHEN. Muttermörder! Gibts Muttermörder?

FRAU MARTHAN. Obs ihrer gibt? Wie das gefragt ist! — Weiß sie denn nit mehr, der Kerl, *wie hieß er doch?* Der seiner Mutter die Gurgel wollt abschneiden —

EVCHEN. Ja, ja! ich besinn mich; — seine Mutter war eine Hure, er ein Bastert (*sic*), im Bordel (*sic*) gezeugt, das warf ihm einer im Trunk vor, da gab er seiner Mutter den Lohn, der ihr gebührte; — ich erinner michs gar wohl.

(Heinrich Leopold Wagner, *Die Kindermörderin*, 6.Akt)

エーフヒェン 母親殺しだなんて。そんな人なんているの？

マルタン夫人 いるのなんて、なんてばかなこと聞くのよ。もう覚えていないの？あの男、ほら、なんていったっけ？母親ののどを掻き切ろうとしたほらあの・・・

---

3) 具体例については Iwasaki, Eijiro (2005) をも参照のこと。

エーフヒエン そう、そう、思い出したわ。母親が娼婦で、自分は売春宿で生まれた私生児で、あの男、飲んでいるときにそのことを人から非難されて、母親にそのお返しをしたってわけね。母親も自業自得よね。よく覚えているわ。

(ハインリヒ・レオポルト・ヴァーグナー、*嬰兒殺しの女*、第6幕)

(2)

LUISE. Gnädige Frau, ich erwarte Ihre Befehle.

LADY (*dreht sich nach Luise um und nickt nur eben mit dem Kopf, fremd und zurückgezogen*). Aha! Ist Sie hier? — Ohne Zweifel die Mamsell — eine gewisse — *Wie nennt man Sie doch?*

LUISE (*etwas empfindlich*). Miller nennt sich mein Vater, und Ihre Gnaden schicken nach seiner Tochter.

LADY. Recht! Recht! Ich entsinne mich — [...]

(Friedrich von Schiller, *Kabale und Liebe*, 4.Akt, 7.Szene)

ルイーゼ 奥さま、何かお言いつけくださるのを待っております。

夫人 (ルイーゼのほうに向きなおり、ほんのすこしうなずく。よそよそしくひかえめな調子で) おや、来ていたの? — まちがいなくあの娘さんね。 — ほらなんとかいう — なんとという名前でしたっけ。

ルイーゼ (いくぶん気分をそこねて) 父はミラーと申します。そのミラーの娘を奥さまはお呼びになったのでございます。

夫人 そう、そう、思い出したわ。 [...]

(フリードリヒ・シラー、*たくらみと恋*、第4幕、第7場、吉田正巳訳)

(3) Endlich entsann sie sich, daß ihr Christel von Abendgottesdiensten erzählt hatte. *Wo doch?* In der Nikolaikirche. Richtig. Es war weit, aber desto besser. Sie hatte so viel Zeit übrig, und die Bewegung in der frischen Luft war seit Wochen ihr einziges Labsal. So machte sie sich auf den Weg. [...]

(Theodor Fontane, *L'Adultera*, 21.Kapitel)

やっと彼女は、クリステルが夕べの礼拝式の話をしていたことを思い出した。どこだったかしら? そうだ、ニコライ教会だったわ。そうよ。

教会までは遠い<sup>みちのり</sup>道程だったが、そのほうがかえってよかった。時間はたっぷりあったし、戸外の新鮮な空気のなかを歩き回ることがここ数週間以来彼女の唯一の楽しみだった。というわけで彼女は出かけた。[…]

(テオドール・フォンターネ、不貞の女、第21章)

「彼女」とあるのは主人公の女性メラニーエのことで、彼女はその日に夕べの礼拝式が行われることをクリステルから聞いていた教会の名前が一瞬思い出せなくて、Wo doch? と自問したのであろう。

(4) „Warum,“ sagte der Heilige, „ging ich doch in den Wald und die Einöde?

War es nicht, weil ich die Menschen allzusehr liebte? Jetzt liebe ich Gott: die Menschen liebe ich nicht. Der Mensch ist mir eine unvollkommene Sache. Liebe zum Menschen würde mich umbringen.“

(Friedrich Nietzsche, Also sprach Zarathustra, 1. Teil, Zarathustras Vorrede, 2)

「いかなれば」と聖者は言った。「いかなれば、われは森と荒涼との中に入り行ったのであるか？これすなわち、わが人間を愛することあまりに甚だしかった故ではないか？いま、わが愛するは神である。人間ではない。われにとっては、人間はあまりにも不完全なる存在である。人間への愛はわれを死なしむるであろう。」

(フリードリヒ・ニーチェ、ツアラトストラかく語りき、第1部、ツアラトストラの序説2、竹山道雄訳)

「いかなれば、われは森と荒涼との中に入り行ったのであるか？」という格調の高い訳文だけでは分かりにくいかもしれないが、30歳のときに故郷と故郷の湖を去って山に入ったツアラトウストラは、それから十年の歳月が経ったいま、あのとき自分がなぜ山に入ったのか、その動機をもうはっきりとは覚えていないことが、Warum ging ich doch in den Wald und die Einöde? という自問に見られる doch からはっきり読み取れるのである。

(5) „[...] Wenn Sie Krankheit für etwas so Vornehmes und — wie sagten Sie doch — Ehrwürdiges zu halten scheinen, daß sie sich mit Dummheit schlechterdings

nicht zusammenreimt. Dies war ebenfalls Ihr Ausdruck. Nun denn, nein! Krankheit ist durchaus nicht vornehm, durchaus nicht ehrwürdig, — diese Auffassung ist selbst Krankheit oder sie führt dazu. [...]"

(Thomas Mann, Der Zauberberg, 4.Kapitel, Notwendiger Einkauf)

「[...] あなたが病気をなにかたいへんに高貴なもの — さきほどなんといわれましたか — 尊敬すべきものであって、愚かしさとは根本的に調和しないものであると考えられるのに、わたしは抗議をします。調和しないというのも、あなたのえられた表現です。そこで否です！病気はすこしも高貴ではなく、尊敬すべきものでもありません、— そういう考え方そのものが、病気であり、病気に導く考え方です。[...]」

(トーマス・マン、魔の山、第4章、必要な買い物、関泰祐、望月市恵訳)

- (6) „Ich bin zwei Jahre in Amerika gewesen“, erklärte er, „und nur zehn Tage in Deutschland. Trotzdem finde ich Deutschland viel schöner. Ich habe damals so viel in Deutschland gesehen und erlebt. Zum Beispiel auch noch eine ganz verrückte Sache, in Berlin, wie hieß das doch, die Dreipfennigoper, das war ein bißchen zynisch, aber auch ganz schön, [...]“

(Klaus Mann, Flucht in den Norden, 1.Kapitel)

「ぼくは二年間アメリカに行ってたんです」と彼は言った。「ドイツには十日間しかいませんでした。それなのにぼくはドイツのほうがずっと素晴らしいと思います。あのときドイツではずいぶんとくさんのものを見たし、いろいろな経験もしました。たとえばものすごい経験もあったんですよ、ベルリンでね、なんていいましたっけ、そうあの三文オペラ、ちょっぴりシニカルだったけど、でもけっこう素晴らしかったですよ [...]」

(クラウス・マン、北へ逃れて、第1章)

- (7) So, nun ist es heraus. Mir ist leichter um's — wie sagt man doch? richtig: um's Herz. Das wollte ich sagen. [...]

(Eckart Kroneberg, Der Grenzgänger, 1.September)

そう、これですべて話しました。楽になりましたよ、ほら、何でしたっけ、そう、気持ちがね。気持ちが楽になったと、そう言いたかったんですよ。[…]

(エッカルト・クローネベルク、越境者、9月1日)

Mir ist leichter um's Herz. と言おうと思って、um'sのあとのHerzが咄嗟<sup>とっさ</sup>には思い浮かばず、それを何とか思い出そうとする気持ちがWie sagt man doch?という言葉になったのである。richtigという表現は文例(3)にも使われているが、記憶に呼び起こそうとしていたことが念頭に浮かんだときに好んで使われる形容詞で、さしずめ日本語の「あっ、そうだ」などに相当する言葉だろう。

(8) Er stand vorn auf dem Podest am Pult und verteilte die Referate für den nächsten Donnerstag und schrieb auch dieses Fräulein in die Liste so widerspenstig sie sich betrug, wie hiess sie doch, mit dem Vornamen? Gisela hiess sie, tun Sie mir den Gefallen: sagte er lachend, aufsässig nahm sie die Versöhnung an (die kleinen Mädchen).

(Uwe Johnson, Mutmassungen über Jakob, 2. Teil)

彼は前の教壇の上に立って講義卓のところをつぎの木曜日のための報告を割り当てていたが、あの片意地な態度の娘さんの名前もリストに書き込んだ。なんていったっけ、洗礼名のほうは？ ギーゼラだったな、お願いしますよ、と彼は笑いながら言ったが、反抗的な態度を見せながらも彼女はこの和解の申し出を受け入れた(この小娘たちときたら)。

(ウーヴェ・ヨーンゾン、ヤーコプについての推測、第2部)

「彼」なる人物、すなわちブラハ氏は、あの小生意気な女子学生の苗字<sup>みょうじ</sup>は覚えていたが、洗礼名のほうを一瞬思い出さなかったのもので、Wie hieß sie doch, mit dem Vornamen? と自問したのである。なお句読点の打ち方がおかしいと思われるかもしれないが、これはヨーンゾン独特のもので、ミスプリントではない。

(9) Kurz vor acht ist der Brenner zur Engljähringer gekommen. Und jetzt ist es schon neun vorbei gewesen. Draußen schon stockfinster.

„Trinken Sie noch ein Glas?“ sagt die Lehrerin Engljähringer. Sie lächelt aufmunternd. Es ist aber jetzt schon sein drittes gewesen. Und ihr drittes. Vielleicht ein gutes Zeichen, hat sich der Brenner gedacht.

„Sie wissen ja, daß die Leute reden, die Clare sei, *wie sagen sie hier doch so nett?* Ein Nebenzu“, sagte die Lehrerin.

„Ein Nebenzu?“

„Ein illegitimes Kind des Vergolders.“

Jetzt aber. Ein Nebenzu. Der Brenner hat sich nichts anmerken lassen. Nur daß er sich jetzt gleich selber einen Amaretto einschenkte.

(Wolf Haas, Auferstehung der Toten, 7.Kapitel).

ブレンナーがエングレイエーリンガーのところへ来たのは8時ちょっと前だった。そしていまはすでに9時を過ぎていた。そとはもう真っ暗だった。

「もう一杯いかが？」とエングレイエーリンガー先生が尋ねる。彼女はどうぞと促すようにほほえむ。でも彼はもう三杯目だった。そして彼女も三杯目。ひょっとしてうまくいくかも、とブレンナーは考える。

「御存知よね、噂ではあのクラレは、ほら何でしたっけ、このあたりでちょっとおもしろい言い方をするじゃありませんか？ そうそう、ついでに作った子供だそうですね」と先生が言う。

「ついでに作ったですって？」

「あの金メッキ職人の私生児なんですって」

これはこれは。ついでに作ったか。ブレンナーは何も表情には出さなかった。ただ今度はすぐに自分からグラスにアマレットを注いだ。

(ヴォルフ・ハース、死者たちの復活、第7章)

nebenzu という単語は、ドゥーデンの十巻物のドイツ語大辞典 (Duden: Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in zehn Bänden) にも採録されていないほどで、使用頻度はいたって低いが、nebenbei とほぼ同義で、「そのかたわら」「片手間に」「ついでに」などを意味する副詞である。頻度が

低いとはいっても地域によってはよく使われるのか、それとも個人的な好みにもよるのか、インターネットで調べてみれば使用例はいくらでも見つかる。たとえば *Ich möchte nebenzu noch etwas verdienen.* (自分の仕事とは別にいくらかの収入を得たい) というような使い方である。その *nebenzu* がここでは *ein Nebenzu* として名詞的に用いられている。一応「ついでに作った」と訳しておいたが、結婚生活とは別にほかで作った子供を指しているのであろう。

ところで以上の例文を読まれて、*doch* を含む補足疑問文の時制が、動詞の省略されている文例 (3) の場合は別として、文例 (2), (7), (9) がいずれも〈現在〉(Präsens) (*Wie nennt man Sie doch? / Wie sagt man doch? / Wie sagen Sie hier doch so nett?*) で、それ以外がすべて〈過去〉(Präteritum) (*Wie hieß er doch? / Warum ging ich doch in den Wald und die Einöde? / Wie sagten Sie doch? / Wie hieß das doch? / Wie hiess sie doch, mit dem Vornamen?*) であることに気付かれたであろうか。時制が〈現在〉なのかそれとも〈過去〉なのかについては、それぞれそれなりの必然性があるのだが、本題とは直接の関係がないので、ここではこれ以上は立ち入らない。なぜ〈現在〉なのか、なぜ〈過去〉なのか、その理由を考えてみていただきたい。

ではこのへんでそろそろ本題に入ろう。まずこの種の補足疑問文になぜ好んで心態詞 *doch* が使われるのかを考えてみたい。*doch* の用法について考えるからには、「*doch* とは何ぞや？」というあの関口存男氏の卓抜な議論を避けて通るわけにはいかない<sup>4)</sup>。大先生と小先生の会話、というよりはむしろ小先生が大先生の教えを乞うという形をとるこの議論は、ほんの5ページほどの短いものにすぎないが、その短い応答のなかで大先生は、いや関口存男先生は、*doch* の本質をじつに見事に解き明かしてみせる。その *doch* の例として使われるのが、地動説の撤回を余儀なくされたあのガリレオ・ガリレイの言葉として有名な「それでも地球は動く」のドイツ語訳 *Und die Erde bewegt sich doch.* である。大先生はこの言葉を「それでもやっぱり地球は動いている」と訳してみせたうえで、ガリレイは地球が動い

---

4) 関口存男 (1939) 202-206 頁。なおこの卓論は、江沢建之助氏のすぐれた翻訳によってドイツの学界にも紹介されている (Sekiguchi, Tsugio (1977))。

ていることをまず肯定し、次に否定し、さらにまた「それでもやっぱり地球は動いている」とつぶやいて元の肯定に逆戻りするが、その最後の段階の肯定こそが doch の本質であり、その本質をもっとも的確に捉えている日本語の訳語が「やはり」や「やっぱり」なのだと言小先生に教えるのである。もっとも大先生はかならずしも「やっぱり」という言葉自身に拘泥しているわけではない。

大先生 勿論如何なる場合にも「やっぱり」が当てはまると云うのではありません。時には「どうも」に当たることがあります（これは辞書にも出てゐます）、時には「流石に」と云った方が好いことがあります。けれども、要するに、ドイツ語をやる人が苦勞をする場合の過半部を一舉に解決する絶好の譯語としては、私はやっぱり「やっぱり」を推舉したいと思ふ。その方がやっぱりハッキリします。では少し理窟を捏ねませう。「やっぱり」とは何ぞや。

これに続いて大先生は、「やっぱり」は必ず「否定」から出立して「肯定」に戻ることを強調したうえで、降雪を例にとり、

[第一段階＝肯定] 元来雪は毎年降るとしたものである。(きまった話)

[第二段階＝否定の動き] ところが今年ひょっとすると降らずに終わるのではあるまいか？

[第三段階＝肯定への逆戻り] いや『やっぱり』降った。(『さすがは』冬だ)。

という図式を提示し、第三段階目こそが doch すなわち「やはり」の出番であることを明らかにする。見事な説明ぶりである。ところがこれを改めて読み返してみたころの私は — あれはたしかもう二十数年ほど前の話だったと思うが — ちょうど心態詞の doch ばかりに自分の関心が向けられていたせいもあり、おまけに大先生が Die Erde bewegt sich doch. や Es hat doch geschneit. のような副詞の doch だけを取り上げていて、Kommen Sie doch herein! / Ach, hätte ich doch Geld! / Wie war doch Ihr Name? などに見ら

れる心態詞の doch の具体例にまったく言及していないのがむしろ不満で、いまから思えばまことに浅はかな話だが、「勿論 doch には色々な場合があって、それを完全に羅列するとすれば、とても時間がかかるでせう。けれども、本質を主として問題にすると、まづ「やっぱり」を中心にして考え、それから出発して次に命令文、嘆願文の doch、返事としての doch、関係文内の doch と云ったやうに分類して行かなければなりません」と大先生がわざわざだめを押しているにもかかわらず、当時の私は、ここに書かれていることは心態詞の doch とは関係ない、心態詞を「やっぱり」と訳せるはずもないし、などと軽く考えていたにちがいない。ところがその蒙<sup>もう</sup>を啓<sup>ひら</sup>いてくれたのが上に触れた佐藤清昭氏の労作「関口存男の「やっぱり」は心態詞にも該当 — 「Doch とは何ぞや？」の構造主義的解釈 —」であった。紙数の関係で氏の論旨に詳しく立ち入る余裕はないが、大ざっぱに言えばこの論文は、心態詞としての doch をまず 7 種類に分類し、それぞれのタイプの doch が「第三段階＝肯定への逆戻り」の役割を演じていることを証明するきわめて意欲的な試みであった。佐藤氏の証明の仕方は私にとってはきわめて納得のいくものであり、その 7 種類の doch のなかには、Wie war doch Ihr Name? 型の doch も 4 番目のタイプ、すなわち doch<sup>4</sup> として含まれているので、その箇所をそのまま引用しておこう。

doch<sup>4</sup> : Wo waren wir doch stehengeblieben?

どこまでお話ししたんでしたっけ?

- |                |  |
|----------------|--|
| [第一段階＝肯定]      | どこまで話したのか知っている                               |
| [第二段階＝否定の動き]   | 失念！ 知らない？                                    |
| [第三段階＝肯定への逆戻り] | いいや、やっぱり知っているはずだ。<br>ちょっとヒントを言ってくればすぐ思い出します。 |

これを読めば、心態詞の doch も上に挙げた大先生による降雪の例に見られるふつうの副詞の doch の場合に完全に対応していることがよく分かるはずである。それでは私も Wie war doch Ihr Name? の doch について、佐藤氏に倣<sup>なら</sup>って関口流の証明を試みることにしよう。

Wie war doch Ihr Name?

- [第一段階=肯定] 私はあなたの名前を知っている。  
[第二段階=否定の動き] 失念してその名前が頭に浮かばない。  
[第三段階=肯定への逆戻り] その名前をいまずぐにも思い出さずだ。

この第三段階の「いまずぐにも思い出さずだ」の「いまずぐにも」(jetzt gleich) という気持ちが昂じると、そのまま言葉となって doch gleich となる場合もある。

(10)

ADOLPH. Also die Madame Friedberg — Wo ließen wir sie? — denn ich muß Euch sagen, ich habe Gutes mit ihr im Sinne; notabene, wenn ich finde, daß sie eine sittsame, tugendhafte Person ist.

KRAUTMANN. Das ist sie, bei meiner armen Seele.

ADOLPH. Das freut mich. Meine Tante soll darum wissen. Ihr kennt doch meine Tante? Es ist eine reputierliche, schon etwas bejahrte Dame; die führe ich selbst in das Haus — *wo war es doch gleich?*

KRAUTMANN *zutraulich*. An der Ecke bei der Frau Wunschel.

ADOLPH. Ganz recht; bei der Frau Wunschel.

KRAUTMANN. Im dritten Stock, — rechter Hand.

ADOLPH. Scharmant!

KRAUTMANN. Gott sei gedankt, daß die wackere Madame in so gute Hände geraten ist.

ADOLPH. In die besten von der Welt.

(August von Kotzebue, Die beiden Klingsberg, 1. Akt, 5. Szene)

アドルフ で、そのフリートベルク夫人のことだが、どこへ連れて行ったのかね? というのもじつはわたしはその女性に善行を施そうと思ってね、もちろん彼女が品行方正で貞節な女性というのが前提だが。

クラウトマン そのとおりの女性です、誓って申し上げますが。

アードルフ それはよかった。叔母にそのことを知っておいてもらいた  
いと思ったから。わたしの叔母のことは知ってるだろう？ もういく  
らか年を取ってはいるが、尊敬すべき女性でね。その叔母をわたしが  
じきじき連れて行くつもりなんだ、その家へね、ほれ、どこだったっ  
け？

クラウトマン (つい心を許して) あの角<sup>かど</sup>のヴンシエル夫人のところですよ  
ね。

アードルフ そうだったね、ヴンシエル夫人のところだったよ。

クラウトマン 四階の右手の部屋で。

アードルフ すばらしいよ。

クラウトマン ありがたいことでございます、あの健気な女性がそんな  
に御立派な方に面倒を見ていただけるなんて。

アードルフ これ以上のしあわせはないさ。

(アウグスト・フォン・コッツェブー、クリングスベルク親子、第1幕、  
第5場)

これはコッツェブーの喜劇からの一場面だが、この会話のやりとりはい  
ささか手が込んでいるので説明しておこう。アードルフにはじつは下心が  
あって、フリートベルクという女性が住んでいる場所をなんとかしてクラ  
ウトマンから聞き出そうとしている場面だということを念頭に置いて、も  
う一度読み直して見ていただきたい。その前提に立てば、*Wo war es doch  
gleich?* という問いは、すでに知っていたことを失念したためではなく、失  
念したふりをしてその家の場所をたくみに相手から聞き出すための、それ  
もいますぐにでも (*gleich*) 聞き出すためのトリックであることが読み取  
れるはずである。

(11) [...] *Man lachte schon im voraus und drängte mich zu ihm hin. Als er mich  
bei sich sah, schlug er ein spöttisches Gelächter an.*

„Na, da seid Ihr ja endlich — Ihr — Ihr — *wie war doch gleich Euer Name?*“

„Meier“, antwortete ich.

(Karl May, Weihnacht, 8.Kapitel)

[...] 初めからみな笑い声に包まれて、私は彼のところへ連れていかれた。私の来るのを見ると、彼は嘲りの高笑いを響かせた。

「おや、やっとお越しですな、ええと、ええと、何てお名前でしたっけな？」

「マイヤーです」と私は答えた。

(カルル・マイ、クリスマス、第8章)

(12) Nachdem auch dies Händeschütteln überstanden war, ließ der Schwiegervater den Blick auf ein farbloses Wesen weiblichen Geschlechts frei, neben dem ein Junge von neun oder zehn Jahren die Szene mit den aufmerksamen Augen eines kleinen Tieres betrachtete.

Mein Gott, durchfuhr es mich, nur jetzt keinen Fehler machen! *Wie heißt der Junge doch gleich?* Irgendein kurzer Name, Kurt oder Fritz. Nein, das stimmt nicht. Aber man hat es mir doch geschrieben. Wie konnte ich es nur vergessen? Aber ich hatte Glück. „Nun, Gert, willst du deinen Vater nicht begrüßen?“ sagte die farblose Person. Aha, Gert also! [...]

(Hans Erich Nossack, Der jüngere Bruder, 1.Kapitel Die Ankunft)

わたしがこの握手もどうやら無事に切り抜けたあと、<sup>しゅうと</sup>舅がわきへ下がると、うしろに目立たぬ一人の女性の姿が見え、その傍らで9歳か10歳の男の子が、小動物特有の注意深いまなざしでこの場面を観察していた。

たいへんだ、わたしはいきなり頭をがんとやられた感じだった、ここで失敗するわけにはいかないぞ。この子の名前は何かだっけ？ 何か短い名前だったはずだ、クルトだったっけ、それともフリッツか。いや、そうじゃない。手紙で知らせてくれたはずだが。何でまた忘れてしまったんだ？

でもわたしは幸運に恵まれていた。「さあ、ゲルト、お父様にご挨拶をしないの？」とその目立たぬ人物が言った。そうか、ゲルトだったのか [...]

(ハンス・エーリヒ・ノサック、弟、第1章 到着)

とにかくすぐにでもこの子の名前を思い出さなければ、という焦りの気持ちだが *doch gleich* という言葉になったのであろう。

(13) *Erinnerte ihn diese Schnecke nicht an irgend etwas? Natürlich erinnerte sie ihn an etwas. Sie erinnerte ihn an... wie hieß der Mann doch gleich, der kleine schlechtrasierte Franzose, der so gern lächelte? Duval hieß er. Duval...*

(Curt Riess, Sie haben es noch einmal geschafft, Schneckentempo)

このカタツムリを見ているとおれは何か思い出すことがあるんじゃないかな？ もちろんあるさ。思い出すのは… あの男、ほら何ていう名前だったっけ、あのひげの剃り方のへたくそな、そしていつも微笑していたあのフランス人の小男は？ そう、デュヴァルだった、デュヴァル…  
(クルト・リース、彼らはもう一度やり遂げた、カタツムリのテンポ)

### III noch について

次に本論の第二のテーマである補足疑問文に用いられる *noch* に話を移そう。つまりこの種の補足疑問文には *doch* とはまったく異質の *noch* が用いられることもあるからである。この *noch* をいかに解釈すべきかについては、私も以前に書いたことがあり<sup>5)</sup>、その後それに対して諏訪田清氏からの反論があったが<sup>6)</sup>、その反論に対する私の考えを述べる前に、まずこの種の *noch* の具体例をいくつかお目につけよう。

(14)

Arthur (*verwirrt wieder aufschreckend*): Wie? Wie bitte? Sagtest du was?

Vera: Nein, hast du Nerven! Warst du schon wieder am Einschlafen?

Entschuldige, das ahnte ich ja nicht. Ich sagte nur, die Thormann hatte ein unmögliches Dekolleté — findest du nicht?

Arthur (*müde murmelnd*): So. Ja, kann sein.

Vera: Also, komisch, du siehst so etwas überhaupt nicht. Du hast doch lange mit

---

5) 岩崎英二郎 (1968) ; Iwasaki, Eijiro (1977)

6) 諏訪田清 (1986)

ihr gesprochen! Wo siehst du eigentlich hin, wenn du mit einer Frau redest?  
— Ich weiß nicht, Arthur, du hast so gar keinen erotischen Sinn mehr. Naja.  
— Übrigens die Frau Dingsda sah ganz nett aus — *wie heißt sie noch?* Ich  
saß eine ganze Weile mit ihr zusammen. Aber daß sie die Frau so eines  
bekannten Schriftstellers ist, das kann man sich kaum vorstellen. [...]

(Christian Bock, Nachtgespräche, 13.Szene)

アルトゥール (ふたたびはっと目を覚まし、どぎまぎしながら) え?  
何だって? いま何か言った?

ヴェーラ まあ、あなたってずいぶん神経が太いのね。もうまた眠りか  
けてたの? ごめんなさいね、そうとは知らずに。あのトールマンて  
いう女のデコルテ、見られたもんじゃなかったって言っただけよ、そ  
う思わない?

アルトゥール (眠そうにつぶやきながら) そうかい。うん、そうかも  
ね。

ヴェーラ おかしな人ね、あなたって、そういうことは全然目に入らな  
いんだから。あの人とあんなに長いこと話していたくせに。あなたっ  
て、女の人と話をするとき、どこ見てんのよ。アルトゥール、あなた  
にはもうお色気なんてまったく無関係なのね。まあそうかもね — そ  
れはそうとあの何とかいう女、けっこう感じよかったじゃない — な  
んて名前だったかしら? あたしもけっこう長いこといっしょに坐っ  
ていたけど。でもあの人がある作家の奥さんだなんて、信じられな  
いわね。[...]

(クリスティアン・ボック、夜の会話、第13場)

(15) „Ich habe Ihnen also diesen sonderbaren Gefallen getan“, sagte der Professor  
und schaute sinnend auf Dora Martins Schultern, deren Magerkeit der  
Frisiermantel bedeckte. Dieser Bursche ist engagiert — dieser — *wie heißt er  
noch?*“

„Höfgen“, lachte die Martin. „Hendrik Höfgen. Sie werden sich den Namen  
schon noch merken, mein Lieber.“

(Klaus Mann, Mephisto, 6.Kapitel)

「私は君のたっのお望みを叶えましたよ」と、<sup>プロフェッサー</sup>大先生は言って、化粧着で隠されているドーラ・マルティンの瘦せた肩を想像しながら、悩ましそうに見つめた。「例の若僧と契約したよ — 例の — ええとなんて名前だっけ？」

「ヘーフゲンよ」と、マルティンは笑った、「ヘンドリック・ヘーフゲン。あなたもきつといまに、この名前を覚えるようになるわ、<sup>マインリーバー</sup>あなた」  
(クラウス・マン、メフィスト、第6章、岩淵達治ほか訳)

- (16) [...] Mehr noch: daß Hausautor Gregor von Rezzori mit levantinischer Nonchalance seine Rechnungen — seien es die des Schneiders, seien es die des Hotels „Vier Jahreszeiten“ — an den Verlag zur Regulierung schicken ließ, wurde unter „Autorenpflege“ verbucht. In einem STERN-Interview späterer Jahre hat er diesem „äh, wie heißt er noch — ja, richtig, Raddatz“ angelastet, ihn seinerzeit aus dem Rowohlt Verlag verdrängt zu haben. Das ist so nicht richtig. [...]

(Fritz J. Raddatz, Unruhestifter, Erinnerungen, Sieben)

[...] それだけではなかった。出版社お抱えの作家グレーゴル・フォン・レツォーリが近東出身者特有の無頓着さで彼のつけを — 服の仕立て代だったか、ホテル「フィア ヤーレスツァイテン」の宿泊代だったか — なんとかしてくれとって出版社にまわしてよこしたとき、私はそれを「著者接待費」として処理してやった。そのくせ彼は、後年雑誌シュテルンのインタビューのなかで、私が、つまり彼に言わせると、あの「ええ、あの何とかいう、うん、そうそうラダッツ」なる男が、彼をローヴォルト出版社から追い出したとって責任を私にかぶせたのだった。そんなやり方は正しくないと思う。 [...]

(フリッツ・ラダッツ、ごたごたを起こす男、回想録、第7章)

- (17) Er fuhr also zu seinem Freund, dem Hausarzt Dr. Schmauser. Und er wurde hintenrum eingelassen, am Geraune des Wartezimmers vorüber, und in ein Hinterzimmer geführt, wo alte Akten lagen. Hier war man ungestört. Dr. Schmauser nahm ihn in den Arm und blickte ihn treu an: Wo will's noch

hinkommen mit uns? — Was er zur deutschen Literatur sagt, ob die nicht langsam, aber sicher abnippelt? Ja?

Als Alexander ihm antworten wollte, winkte er ab, schon gut, schon gut... Seine Frau liest im Augenblick den *wie heißt er noch*... Prack, ja, Prack, der ist doch immer wieder wahnsinnig gut.

(Walter Kempowski, Letzte Grüße, 1. Teil, 2. Kapitel)

彼は友人でかかりつけの医者でもあるドクター・シュマウザーのところへ出かけていった。そして患者達の声のざわめきを耳にしながら待合室の横を通り抜けて、古い書類の置いてある裏の部屋へ通された。ここならば邪魔されずに話ができる。ドクター・シュマウザーは彼を抱擁し、おれたちはこの先どうなるのかねというような、いつもと変わらぬ愛情の籠もった目で彼を見た。— ドイツの文学をどう思うかね、ゆっくりと確実に滅びつつあるのかな? そうだろう?

アレクサンダーがそれに答えようとする、手で<sup>さえぎ</sup>遮った。いいんだ、いいんだ、女房がいま読んでいてね、ほらあの… プラック、そう、プラックさ、彼の書くものはいつもものすごくいいって話だから。

(ヴァルター・ケンポウフスキー、最後の挨拶、第1部、第2章)

文例(14)から(17)までの *Wie heißt sie noch?* や *Wie heißt er noch?* に共通する *noch* は何を意味しているのだろうか。かつて私は『ドイツ語不変変化詞の用例』と題する本のなかでこの問題を取り上げ、*noch* が用いられるのは、いま思い出そうとしている事柄が「まだ」(*noch*) 自分の記憶に残っているはずだという話し手の気持ちがそこに表れているのではなからうかと解釈したが<sup>7)</sup>、のちに諏訪田清氏が「*Wie hieß er noch?* について」と題する論文のなかで、関口存男氏による *noch* の解釈を援用しつつ、私のこの考えを真っ向から否定された<sup>8)</sup>。私とその論文を目にしたのは、その論文が発表されてからだいぶ経ってからのことではあったが、最近改めて読み直してみて、*Wie hieß er noch?* の *noch* をあとで述べる継続型の *noch*

7) 岩崎英二郎 (1968) 332 頁。

8) 諏訪田清 (1986) 383-384 頁。

と考えた私の解釈をあやまりとする諏訪田氏の主張が完全に正しかったことに遅まきながら気がついた<sup>9)</sup>。言い換えれば、まことに汗顔のいたりだが、上記の私の解釈はまったく見当違いだったことがよく分かったのである。「まったく」とはどういうことかという、この *noch* は、あのころの私が考えていたような過去からの継続を示す *noch* (例: *Ich weiß es noch. / Sie lebt noch.* など) ではなく、それとはまったく逆の、ある事柄が未来に生起するであろうことを示す *noch* (例: *Er wird noch kommen. / Du wirst es noch bereuen.* など) であったからである。これを具体例について言えば、*Wie hieß er noch?* の場合、この *noch* は *Ich weiß seinen Namen noch.* (私は彼の名前をまだ覚えている) の *noch* ではなく、*Sein Name kommt noch.* (彼の名前はこれからまだ頭に浮かんでくるにちがいない) の *noch* だったということである。そのように解釈してみると、次に示すような *noch gleich* の例もずっと理解しやすくなる。諏訪田氏に批判された私の場合、彼の名前は「まだ」(*noch*) 記憶に残っているはずだという気持ちと、どうしても思い出せない彼の名前を「いますぐにも」(*gleich*) 知りたいという〈性急さ〉とが<sup>あいま</sup>相俟って *noch gleich* という形をとったのだろう、というまことに苦しい解釈をしていたのだが、*Sein Name kommt noch gleich.* (彼の名前はいますぐにでも浮かんでくる) のように考えてみたほうが、*noch* と *gleich* が併用される理由がはるかに理解しやすくなる。

(18) [...] *Zu höflich, sich abzuwenden und sich seinem Atem zu entziehen, saß sie steif und möglichst hoch aufgerichtet und blickte mit gesenkten Lidern auf ihn nieder. Aber er bemerkte durchaus nicht das Gezwungene und Unangenehme ihrer Lage.*

„Wie ist es, gnädige Frau“, sagte er... „Mir scheint, wir haben früher schon einmal Geschäfte miteinander gemacht? Damals handelte es sich freilich nur... *um was noch gleich?* Leckereien, Zuckerwerk, wie?...Und jetzt um ein ganzes Haus...“

---

9) ただし私はこの種の *noch* や *noch schnell* についての諏訪田氏の解釈にすべて同意しているわけではない。

„Ich erinnere mich nicht“, sagte Frau Permaneder und steifte ihren Hals noch mehr, denn sein Gesicht war ihr unanständig und unerträglich nahe...

(Thomas Mann, Buddenbrooks, 9. Teil, 4. Kapitel)

[...] 夫人は儀礼上、身を転じて相手の呼吸を避けることはせず、身体をこわばらせ、出来るだけ背を伸ばして坐り、目蓋を垂れて相手を見下ろした。しかし領事は、夫人が不自然で気持のよくない姿勢であることに全然気づかなかった。

「どうですか、奥さま」と領事は言った… 「わたしどもは、すでに以前一度取引をしたことがあるような気がしますが？ もちろん当時、取引の対象になったのは…。はて何だったかな、ご馳走だったか、お菓子だったか、どうでしたかな？… ところが今は家が丸々一軒というわけで…」

「覚えていませんわ」ペルマネーダー夫人はそう言うと、首を一層こわばらせた。相手の顔が不躰ぶしつけにも我慢ならぬほど近づいて来たからである…

(トーマス・マン、ブデンプロック家の人々、第9部、第4章、森川俊夫訳)

(19) „Sie halten also ein Liebesverhältnis für ganz ausgeschlossen?“

„Zwischen diesem... wie hieß er noch gleich?... und Ihrer Frau? Unmöglich!“ rief Stolling.

(Hans Erich Nossack, Der jüngere Bruder, 1. Kapitel Die Ankunft)

「それではあなたは肉体関係など絶対にあり得ないとお考えですか？」

「あの男…ええと、なんという名前でしたっけね…あの男とお宅の奥さまとのあいだにですか？ とんでもない！」とシュトリングは叫んだ。

(ハンス・エーリヒ・ノサック、弟、第1章到着)

(20) *Wie sagte Janosch noch gleich? Genau: Leben heißt so viel wie nie darüber nachdenken.* Also tun wir es auch nicht.

(Benjamin Lebert, Crazy, 3. Kapitel)

ヤーノシュはどんなこと言ったんだっけ？ そうだ、人生とはソレニツ

イテハケツシテナニモカンガエナイということだって言ったんだ。だからぼくらは何も考えないことにしよう。

(ベンヤミン・レーベルト、クレイジー、第3章)

上に挙げた二つのタイプの *noch*、すなわち過去からの継続を示す *noch* と未来での生起を示す *noch* を私なりに整理してみよう。たとえばある病人が *Ich bin noch krank.* と言えば、この *noch* は自分がいまだに病人であることにこだわるいわば後ろ向きの視点を示しているわけだし、逆にたとえば何かの理由で下痢が止まらなくなって痩せ細ってしまった少年が、健気にも胸を張って *Ich werde noch gesund.* と言ったとすれば、同じ *noch* でもそこには、自分はまた元気になるんだという前向きの視点が示されていると言えるだろう。しかしとかく気分が後ろ向きになりがちな老人だったら、*Zwar bin ich noch gesund, aber ich werde sicher noch krank.* (いまはまだ元気ですけどね、でもそのうちきっと病気になりますよ) と愚痴をこぼすかもしれないし、視点は前方に置かれながらも気持ちは逆に後ろ向きということも充分にあり得る。というわけで話者の視点から前向き、後ろ向きという区別をしてみてもあまり意味はない。この二つのタイプを的確に言い表す呼称はほかにないものだろうか。継続型と到来型というのも一つの案だろう。ある状態の継続を示す *noch* とある事態の到来を示す *noch* という意味である。状態の継続を示す *noch* についての説明は不要と思うが(例: *Er schläft noch.* 彼はまだ眠っている、*Die Hitze wird noch lange dauern.* この暑さはまだまだ続くだろう、*Warst du krank? — Ich bin es noch.* きみは病気だったのか? — いまでもそうだよ)、ある事態の到来を示す *noch* のほうは、すべてに共通する日本語の訳語が見つかりにくいせいもあって、なかなか理解しにくい。関口存男氏の『獨逸語學講話』に収録されている「*Noch* の用法」<sup>10)</sup>では、第四講の『いづれ』の *noch*、第五講の『やがて』の *noch* を中心に、随所で到来型の *noch* が扱われているが、「いづれ」、「やがて」など、適切な訳語にこだわる同氏ならではの名講義ぶりである。この型の

---

10) 関口存男 (1939) 207-249 頁。

noch の例としてよく挙げられるのは bereuen との結びつきだが、Diesen Entschluß wirst du noch bereuen. などは、関口流に「この決心をきみはいずれ後悔することになるだろう」と訳せば〈noch = いずれ〉でぴたりと収まる。しかし Wo bleibt sie nur? Glaubst du, daß sie noch kommt? の noch を「いずれ」と訳すことはもちろんできない。「いずれ」「やがて」というまだまだ遠い先の話ではなく、いまかいまかと待っている「彼女」がこの時間になっても「まだ」来る可能性があるのかどうかを尋ねているのだからである。「彼女、どこにいつちまったんだろうな？ これから来るなんて、まだあり得ることだときみは思うかい？」とでも訳すほかはないかもしれない。

それではこの型の noch の具体例をお目につけよう。いずれも 19 世紀初頭の女流作家の作品からの引用である。

(21) „Herr Graf“ sagte ich manchmal — „Sie werden noch sterben, ohne die Freude gekannt zu haben.“

„Ey da sey Gott für!“ — lachte er mir dann entgegen — „eben weil ich die Freude so außerordentlich liebe, kann ich diesen jungen Leuten nicht folgen.“

(Caroline Auguste Fischer, *Vierzehn Tage in Paris*, Achter Tag)

「伯爵」と私はときどき申し上げたのです — 「このようなことではこの世の楽しみを味わうことなくこの世を去るということになりかねませんよ」と。

「おや、めっそう滅相もない！」 — すると伯爵は笑いながら私にむかって言われました — 「この世の楽しみをこよなく愛すればこそ、私はあの若い人たちにはついてゆけないのですよ」

(カロリーネ・アウグステ・フィッシャー、パリでの 2 週間、8 日目)

(22)

KÖNIG. Nun Marie — sprich schnell, wie konntest du erfahren? Wer, wo ist der Schuldige? Ist er mit ihm entflohen? *Kann ihn meine Rache noch ereilen?*

KÖNIGINN(sic). Zertreten, denn er ist euch nahe —

KÖNIG. O so sprich, verzögere nicht seine Strafe, wo ist er?

KÖNIGIN *nach einer Pause*. Er steht vor euch.

KÖNIG *bebt*. Wie?

KÖNIGIN *mit Ruhe*. I c h, mein König, ich habe ihn befreyt.

KÖNIG *starrt sie betäubt an*. Du? Du — mein Weib?

(Johanna Franul von Weißenthurn, Johann, Herzog von Finnland, 5.Aufzug, 8.Auftritt)

国王 さあ、マリー、早く言いなさい、犯人がだれなのか、いまどこにいるのか、どうしておまえに知ることができたんだ？ 犯人はあの男といっしょに逃亡したのかい？ それともその犯人にわたしが復讐することはまだ可能なのかい？

王妃 その犯人を踏みつぶすこともおできになりますわ。だって犯人はすぐお近くにおりますもの。

国王 なんだって、それでは言っておくれ、彼の処罰を先に延ばさないでおくれ。犯人はどこにいるんだ？

王妃 (一瞬黙ったあと) あなたのお目の前に立っておりますわ。

国王 (身震いしながら) なんだって？

王妃 (泰然として) わたくしです、王様、わたくしがあの男を逃がしたのです。

国王 (茫然と彼女を見つめながら) おまえが？ わたしの<sup>きさき</sup>妃のおまえが？

(ヨハンナ・フラヌル・フォン・ヴァイセントウルン、フィンラント公、第5幕、第8場)

ついでに言うと、このタイプの noch は、schon noch の形で心態詞 schon と併用されることが多い。上に Ich werde *noch* gesund. の例を挙げたが、これが Ich werde *schon noch* gesund. となると、「だいじょうぶさ、ほくはきつと元気になってみせるから」とでもいう感じで、健康な体に戻りたいという話し手の意気込みがいつそう強く感じられる。先に挙げた文例 (15) にも、ドーラ・マルティンという舞台女優が劇場支配人兼演出家の大先生プロフェッサーにむかって Hendrik Höfgen. Sie werden sich den Namen *schon noch* merken, mein Lieber. という箇所があるが、この女優がヘンドリック・ヘーフゲンの俳優

としての実力を高く評価していることが、この schon からも伝わってくる。それでは次に schon noch の具体例をいくつかお目につけよう。

(23)

AGNES. Ihr macht mir aber solche Angst.

PETER. Das ist gut, es ist ein Beweis Eurer Liebe.

AGNES. Wahrhaftig, da ich jetzt mit Euch allein bin, könnt' ich mich vor Euch fürchten.

PETER. Wirklich? — Nun, das ist mir lieb, so etwas hab' ich gern. — *Aber du wirst dich schon noch ganz an mich gewöhnen*, Kind.

(Ludwig Tieck, Der Ritter Blaubart, 2.Akt, 4.Szene)

アグネス でもあなたを見ているととても心配で。

ペーター それはいい、きみがこのわたしを愛してくれていることの証拠だからな。

アグネス ほんとうだわ、こうやってあなたと二人きりになると、なんだかあなたが恐ろしいみたい。

ペーター ほんとうかい? — そうか、それはありがたいな、そういうのはうれしいよ。— でもね、きみはわたしという人間にいずれは慣れ親しんでくれることになるのさ。

(ルートヴィヒ・ティーク、青ひげの騎士、第2幕、第4場)

(24) [...] „Hier ist die Grenze unseres Besitztums. Nur eine Kleinigkeit haben wir noch dort an dem Felsen, wo Sie den Rauch aufsteigen sehen; wir haben den dortigen Grund angeschafft, weil er zu den Erdbrennereien so geeignet ist. Das ganze Anwesen ist klein, ich habe Ihnen alles gezeigt. Es ist nichts mehr übrig. Es wurde bisher daraus gemacht, was nach den Verhältnissen daraus zu machen war; *aber es wird schon noch besser werden*. — Sie müssen gewiß lächeln, wenn Sie das ansehen. Bei Ihnen, denke ich, wird das alles weiter und breiter und prächtiger sein. [...]

(Adalbert Stifter, Zwei Schwestern, Reisebesuch)

[...] 「ここがわたしたちの所有地の界さかいなのです。あそこの岩のそばの、

煙の上がっている小さな土地だけはわたしたちのものです。あそこは土の火入れにいいので、あそこの土地を買ったのです。わたしたちの土地は小さいものです。これでみんなお見せしました。ほかにはもう何もありません。これまでわたしは、ここの環境に応じてできることをやってきました。だけどそのうちきっと、もっとよくなるでしょう。— あなたはこれを見てきっとお笑いになるでしょう。あなたのところではすべてが広々として、素晴らしいんでしょうね。[…]

(アーダルベルト・シュティフター、二人の姉妹、旅の訪問、山崎章甫訳)

(25) Ich durfte nie spielen, und es war überhaupt niemand da. Bloß der Onkel Franz und die Tante Anna, welche den ganzen Tag herumgingen und acht gaben, daß nichts passierte. Aber der Onkel war so streng zu mir und sagte immer, wenn er mich sah: „Warte nur, du Lausbub, *ich krieg dich schon noch.*“

(Ludwig Thoma, Lausbubengeschichten, Onkel Franz)

遊ぶことは絶対に許されなかったし、遊ぼうと思っても仲間が一人もいなかった。そこにいたのは、一日中あちこち見回って何も起こらないように注意を怠らないフランツ伯父さんとアンナ伯母さんだけだった。でも伯父さんはぼくにはとても厳しくて、ぼくの顔を見さえすれば「いまに見ている、かならずとっちめてやるからな」と言うのだった。

(ルートヴィヒ・トーマ、悪童物語、フランツ伯父さん)

(26) „Aber Karl, was fällt dir denn ein?“ rief Robinson und stand schon vor lauter Sorge ziemlich aufrecht, nur mit noch etwas unruhigen Knien, im Wagen.

„Ich muß doch gehen“, sagte Karl, der der raschen Gesundung Robinsons zugesehen hatte.

„In Hemdärmeln?“ fragte dieser.

„*Ich werde mir schon noch einen Rock verdienen*“, antwortete Karl, nickte Robinson zuversichtlich zu, grüßte mit erhobener Hand und wäre wirklich fortgegangen, wenn nicht der Chauffeur gerufen hätte: „Noch einen Augenblick Geduld, mein Herr!“

(Franz Kafka, Amerika, Ein Asyl)

「でもカール、きみはどういうつもりなんだ？」とロビンソンは叫ぶと、心配のあまり身体をかなり真っ直ぐにのぼしてもう車のなかで立ち上がっていた。膝がまだいくらかふらふらしてはいたが。

「でももう行かなくちゃならないから」と、ロビンソンが速かに恢復する様子を見ていたカールは言った。

「シャツの袖をまくりあげたそんな<sup>かつこう</sup>恰好でかい？」とロビンソンはたずねた。

「上着はそのうち手に入れますよ」とカールは答え、自信ありげな様子で彼にむかってうなずくと、手をあげて会釈し、もしも運転手が「もうすこしご辛抱を、旦那」と呼びかけなかったら、そのままほんとうに立ち去っていたことだろう。

(フランツ・カフカ、アメリカ、避難所)

#### IV noch についての Exkurs

ここで一つ、ぜひとも指摘しておかなければならないことがある。それは *Ich bin noch krank.* と *Ich werde noch gesund.* に見られる二つのタイプの noch を、はたして同じレベルの noch として論じてもよいのかという根本的な疑問である。言い換えれば、前者、すなわち仮称〈継続型〉の noch が「まだ」「いまだに」を意味する副詞であることは間違いないとして、後者の仮称〈到来型〉の noch もこれと同じ意味で副詞であると言えるのだろうかという疑問である。じつはこの疑問はこの論文を書いている過程で、とくに上に挙げた *schon noch* の用例を検討しているうちに初めて頭に浮かんできた疑問なので、私としてはいまのところそれについての一応の結論すらまだ持ち合わせていない。というわけで今回はこれには触れずにおこうかとも考えたのだが、この先これについて書く機会があるかどうか<sup>おぼつか</sup>も覚束ないので、あえてこの疑問に触れておくことにする。問題はこういうことである。*Ich bin noch krank.* (私はいまだに病気だ) の場合には、例えば *Noch bin ich krank, aber in acht Tagen kann ich bestimmt wieder im Büro sein.* (いまはまだ病気だが、一週間もすればかならずまた事務所にいられる) のように、noch を対比的に強調するために文頭、つまり文の前域

(Vorfeld) に置くこともできる。つまり統語論的に見てこの noch は、一般の副詞と同様に独立した一個の文成分 (Satzglied) の働きをしているわけである。ところが Ich werde *noch* gesund. の場合はどうだろうか。もしもこの noch が「そのうちになお」とか「いずれ」などを意味するれっきとした副詞であるならば、「いずれは私も元気になるさ」のように noch を強調して文頭に置き、?Noch werde ich gesund. とすることができはるはずだが、実際にはどうもそれができそうにないのである。別の例で考えてみよう。次の三つの例文を比べてみていただきたい。

- イ) Ich habe noch genug Zeit. Ich hole *bestimmt* nach, was ich versäumt habe.
- ロ) Ich habe noch genug Zeit. Ich hole *schon* nach, was ich versäumt habe.
- ハ) Ich habe noch genug Zeit. Ich hole *noch* nach, was ich versäumt habe.

イ) ロ) ハ) いずれの例文も、まだ時間が充分にあるからこれまでの遅れをなんとか取り戻してみせるということを述べているのだが、遅れを取り戻そうとする話し手の意気込みが、イ) の場合には話法詞 (Modalwort) *bestimmt* によって、ロ) の場合には心態詞 (Abtönungspartikel) *schon* によって、それぞれ聞き手に伝わってくる。イ) では必要に応じて「たしかに」「きっと」を意味する話法詞 *bestimmt* を文頭に置くことによって、その気持ちをさらに強調することもできるが (*Bestimmt* hole ich nach, was ich versäumt habe.)、ロ) の *schon* は心態詞であるから、これが文頭にくることはもちろんあり得ない (*\*Schon* hole ich nach, was ich versäumt habe.)。それでは ハ) の *noch* の場合はどうであろうか。ドイツ語を母語とする知人のドイツ人たちに尋ねてみても、?Noch hole ich nach, was ich versäumt habe. という文はごくふつうに耳にする文であると即答する者は一人もいない。ちょっとおかしいなと首を傾げるか、それはあり得ないと否定するかのどちらかである。ということは、これからが私のとりあえずの解釈になるのだが、この *noch* は、もはや客観的に未来のある時点を指す〈時の副詞〉ではなく、意味的 (semantisch) にも統語論的 (syntaktisch) にも徐々に変貌し始め、時間的な要素を含みながらも話し手の〈期待〉〈意欲〉〈自負〉、場合によっては〈怒り〉〈脅し〉等々の主観的な心理を反映する心態詞に

近づきつつあるのではないか、とも考えられるのである。aber, denn, doch, ja, nur, schon 等々、現在心態詞として扱われている語も、初めから心態詞として存在していたわけではない。元来は副詞や接続詞であったものが、時の経過とともにその固有の意味が徐々に稀薄化して、話者の多種多様な心理の綾を反映する心態詞へと変貌してきたものにすぎない。もしかするとここで問題にしている noch も、同様に副詞から心態詞への進化（もしくは退化）の過程にあるのではないだろうか。心態詞とは何か、心態詞の定義は何かについての専門家たちの説はまちまちであるが、これまで心態詞と見なされてきた語が、わずかな例外を除いて文の前域には現れないことは広く認められていることである。ただし上記の noch が前域に置かれにくいからといって、それだけの理由でこの noch の心態詞化を云々することはもちろんできないし、ハ) の Ich hole noch nach, was ich versäumt habe. に見られる noch には「いずれ」を意味する時の副詞 (Temporaladverb) 的な要素が色濃く感じられることも事実である。しかし noch がごくふつうの時の副詞であるならば、なぜこれを単独で文頭、つまり文の前域に置くことができないのだろうか。もしかするとこの種の noch には、語用論的 (pragmatisch) には心態詞的な要素もふくまれているのではなからうか、という私の推測を裏付けるものとしては、次章にも言及するドゥーデンの『ドイツ語大辞典』が、Das wirst du noch bereuen! と Der wird sich noch wundern! の二つの文例に関して、この二つの noch を Adverb としてではなく Partikel (心態詞と訳していいだろう) として扱っているという事実がある。これらの noch は明らかに筆者の言う〈到来型〉に属しているが、この辞書が同様に〈到来型〉に属する Er wird noch kommen. のほうは副詞の項に入れているところを見ると、この項目の執筆者は、同じ〈到来型〉でも「いまに見ている」的な〈脅し〉の調子を含んだものだけにかぎって心態詞と解釈したのだろうか。

もう一つこの noch に関して指摘しておかなければならないことがある。すなわちこの到来型の noch が用いられる文の時制はかならずしも〈現在〉 (Präsens) や〈未来〉 (Futur) に限られるわけではなく、ある事態がすでに到来したことを示す場合には、〈過去〉 (Präteritum) や〈現在完了〉 (Perfekt)、〈過去完了〉 (Plusquamperfekt) の文にも現れるという重要な事

実である。一つだけ例を挙げよう。上のイ) ロ) ハ) の例をそのまま使えば、

二) Ich konnte *noch* nachholen, was ich versäumt hatte.

(私は自分の遅れをなお取り返すことができた)

と言うような場合である。関口存男氏は前者を『いづれ』(ママ) の *noch*、後者を『やがて』の *noch* と呼んで、例によって適切な訳語を通じて両者を区別しておられる。流石さすがと言わざるを得ない。ついでに関口氏が「いづれ」と「やがて」を対比的に示された例文を一つだけ御紹介しておこう<sup>11)</sup>。

Es kann *noch* alles gut werden. (そのうちにいづれまた何とかなるよ)

Es wurde *noch* alles gut. (やがて凡てがよくなって来た)

何はともあれ、この種の *noch* についてはいずれまた稿を改めて考えてみるつもりである。

## V doch と noch の組み合わせ

それではまた本題に戻ろう。表題にも掲げたように、「お名前はなんとおっしゃいましたっけ」型の補足疑問文には、疑問文である以上 *denn*, *nur* などの心態詞が使われたり併用されたりすることもむろんあるが、とくに心態詞の *doch* が際立って多用されること、またそれとは別に、それが心態詞であるかどうかの議論はさておき、未来に視点を据えた仮称〈到来型〉の *noch* もまた好んで用いられること、この二つの点についての例証をこれまで長々と試みてきた。ついでに言えば、「お名前はなんとおっしゃいましたっけ」型の補足疑問文に用いられる *noch* は心態詞と解すべきではないかという問題を筆者が提起したのはいまから 30 年ほど前のことであるが<sup>12)</sup>、現在ではドイツの代表的な辞典 (Hermann Paul, *Deutsches*

---

11) 関口存男 (1939) 234 頁。

12) Iwasaki, Eijiro (1977)

Wörterbuch, 10.Auflage, 2002; Duden, Das große deutsche Wörterbuch in zehn Bänden, 3.Auflage, 1999) でも、この種の noch にかぎって心態詞として扱われている。それでは最後に、心態詞 doch と noch の組み合わせと、さらに gleich がそれに加わる比較的数少ない具体例を二つずつお目にかけて本稿を閉じることにする。ただしこの doch noch はあくまで2個の心態詞の併用であって、同じ doch と noch の組み合わせでも、Trotz der Zugverspätung kam ich *doch noch* pünktlich nach Hause. (列車の遅延にもかかわらず、なんとか時間どおりに帰宅することができた) に見られるような「それでもなお」を意味する doch noch とはまったく異質のものであることを念のためにお断りしておきたい。

(27) „Wo bist du eigentlich am Freitag gewesen? Ich dachte, du wärest zur Modenschau gegangen. Aber Frau von Freiberg hat dich vermißt.“

„Ich war — ich bin spazierengefahren“, erwiderte Barbara.

„Mit dem Herrn — wie heißt er doch noch?“

„Peters.“

„Richtig, Petrus.“

„Peters, Mami“, korrigierte Barbara sanft.

(Michael Horbach, Bevor die Nacht begann)

「金曜日にはどこへ行ってたの？ モードショーへ出かけたとばかり思っていたんだけど。でもフォン・フライベルク夫人はあなたに会わなかったって言うし」

「じつは — ドライブに行ってたのよ」とバルバラは答えた。

「あの人といっしょに？ — なんて名前だったかしら」

「ペーターズよ」

「そうだった、ペートルズさんね」

「ペーターズだってば、ママ」とバルバラは穏やかに訂正した。

(ミヒャエル・ホルバッハ、夜が始まる前に)

(28) [...] Die Stadt war stolz auf ihn, als er das Ritterkreuz gekriegt hat. Und sie hat den Maler Dings, *wie hieß er doch noch*. Bernward, nein, Bernhard,

Bernhard Winter beauftragt, ihn zu malen, mit dem Orden, in Uniform, als Geschenk der Stadt. [...]

(Klaus Modick, Der Flügel, 1.Buch, Bei Muttern)

[...] あの人が騎士十字勲章をもらったとき、この町ではあの人のことが自慢でね。あの何とかいう絵描き、ほら、ええ、何ていったかしら。ベルンヴァルト、いや違う、ベルンハルト、そう、ベルンハルト・ヴィンターに依頼してあの人の肖像画を描かせたのよ、その勲章をつけて、制服姿でね、町からのあの人への贈り物としてね。 [...]

(クラウス・モーディック、グランドピアノ、第1巻、母親の家で)

(29) Soll ich Sie gleich einmal mit ihm verbinden? Denn er ist natürlich sehr überlaufen, doch ich nehme an, daß es sich machen läßt und er Sie irgendwie dazwischenschiebt. *Wie hieß doch noch gleich seine Sprechstundenhilfe?* Eine gutaussehende junge Dame. Warten Sie, ich habe mir das in meinem Merkbuch notiert.

(Hans Erich Nossack, Der jüngere Bruder, 1.Kapitel Die Ankunft)

すぐにあの方と連絡をお取りしましょうか? と申しますのもたいへん多忙なお方なので、しかし可能だと存じますよ、なんとかやりくりしてあなたを割り込ませてくださるでしょう。ええとなんといいましたっけ、あの方の診察助手の名前は? 美しい若い女性でしてね。お待ちください、手帳に書き留めておきましたので。

(ハンス・エーリヒ・ノサック、弟、第1章 到着)

(30) [...] Sarah, bist du noch da?

Natürlich, Mama.

*Wie war doch noch gleich der Name?*

Haresch.

Haresch, sagst du? fragt Lea, als habe sie nicht verstanden.

Ja, der Autor dieses Buchs heißt Claus Haresch. Geboren 1951 in Oldenburg, lebte mehrere Jahre...

(Klaus Modick, Der Flügel, 1.Buch, letzte Siesta)

[...] サラ、まだそこにいるの？  
もちろんよ、ママ。  
その名前、なんといったかしら？  
ハーレシュよ。  
ハーレシュって言ったの？ とレアはよく聞き取れなかったように尋ねる。  
ええ、この本の著者の名はクラウス・ハーレシュよ。1951年にオルデンブルクに生まれて、数年間そこに住んで…  
(クラウス・モーディック、グランドピアノ、第1巻、最後の昼寝)

## V おわりに

稿を閉じるにあたり、このテーマについてさまざまに想を練るきっかけを与えてくださった諏訪田清、佐藤清昭の両氏に対して改めて心からの謝意を表したい。両氏の率直な御批判がなければ、筆者が doch と noch についてふたたび思いを巡らすことはたぶんなかったにちがいない。また両氏の論考にはいずれも関口存男氏の仕事が色濃く影を落としているが、その意味で本稿が結果的に私の心から敬愛する関口存男氏へのオマージュともなったことは、筆者にとってこの上もない喜びである。

(2006年10月)

---

### (引用文献)

- 岩崎英二郎 (1968): „Wie hieß er noch? (『ドイツ語不変化詞の用例』 330-338 頁)
- Iwasaki, Eijiro (1977): „Wie hieß er noch?“ Zur Bedeutung von ‚noch‘ als Abtönungspartikel. in: Weydt, H. (Hrsg.): Aspekte der Modalpartikeln, Tübingen, 1977
- Iwasaki, Eijiro (2005): Die Partikel *doch* in der Ergänzungsfrage — eine diachronische Bestandsaufnahme —. in: Kimura, N & Thomé (Hrsg.): „Wenn Freunde aus der Ferne kommen“ Eine west-östliche Freundschaftsgabe für Zhang Yushu zum 70.Geburtstag, Bern, 2005

- 松本道介 (2006) : 『素朴なる疑問』 鳥影社  
 佐藤清昭 (1995) : 関口存男の「やっぱり」は心態詞にも該当 — 「Doch とは何ぞや？」の構造主義的解釈 —. (『探求ドイツの文学と言語 立川洋三先生退職記念論文集』 1-23 頁)  
 関口存男 (1939) : 『獨逸語學講話』 日光書院  
 Sekiguchi, Tsugio (1977): Was heißt ‚doch‘? Eingeleitet und übersetzt von Kennosuke Ezawa. in: Weydt, H (Hrsg.): Aspekte der Modalpartikeln, Tübingen, 1977  
 諏訪田清 (1986) : Wie hieß er noch? について. (『佐藤自郎教授還暦記念論文集 獨逸文学論文集』 376-384 頁)

(出典著者一覧表)

- Bock, Christian (1906-)  
 Fischer, Caroline Auguste (1764-1842)  
 Fontane, Theodor (1819-98)  
 Johnson, Uwe (1934-84)  
 Haas, Wolf (1960-)  
 Horbach, Michael (1924-86)  
 Kafka, Franz (1883-1924)  
 Kempowski, Walter (1929-)  
 Kotzebue, August von (1761-1819)  
 Kroneberg, Eckart (1930-)  
 Lebert, Benjamin (1982-)  
 Mann, Klaus (1906-49)  
 Mann, Thomas (1875-1955)  
 May, Karl (1842-1912)  
 Modick, Klaus (1951-)  
 Nietzsche, Friedrich (1844-1900)  
 Nossack, Hans Erich (1901-77)  
 Radatz, Fritz J. (1931-)  
 Riess, Curt (1902-93)  
 Schiller, Friedrich von (1759-1805)  
 Stifter, Adalbert (1805-68)  
 Thoma, Ludwig (1867-1921)  
 Tieck, Ludwig (1773-1853)  
 Wagner, Heinrich Leopold (1747-79)  
 Weißenthurn, Johanna Franul von (1772-1847)

(慶應義塾大学名誉教授)